

自然主義的認識論の原型 ―ロックを題材に―

青木 滋之

0 はじめに

本稿は、伝統的に基礎付け主義的な営みと考えられてきたロックの認識論を、当時の科学的なコンテキストの中から再解釈し、自然主義的な認識論の営みとして救い出そうとする試みである。まず始めに、伝統的な近代認識論の理解を述べたあと、私の主張であるロックの科学者の「下働き」としての自然主義的認識論の骨格を描出する。そして最後に、ロックがその認識論を形成した科学史的文脈を詳らかにしたいと思う。

1 ―伝統的な認識論のイメージ vs. ロックの認識論―

伝統的に、近代以降の認識論は、基礎付け主義的なプロジェクトの一環であると考えられてきた¹。例えば、デカルトは＜考える我＞というアルキメデスの不動点からあらゆる学問を築き上げようとした哲学者として再三言及され、基礎付け主義を語る際に、スプリング・ボード的な役割を担う者として常に考えられてきている。デカルトに続くロックは、さらに認識論を組織的に遂行したと言われる。ロックは、知識の起源を経験に求め、さらに知識の本性や、知識と臆見との違いを探究することで、近代哲学の認識論的転回を確固たるものとし、諸学の基礎付けとしての哲学のイメージを強烈に打ち立てることになった。さらにカントは哲学の役割を諸学の法廷になぞらえ、ロックの心理学的な傾向を排しながら、超越論哲学へと認識論を方向づけた。…こうした一連の、認識論的転回とも言われる経緯に特徴的であるのは、(特にカントに言えることだが) 第一哲学としての認識論は、諸学の準備学としての認識論であり、経験科学から独立し経験科学に先立った確実性を持つ、言わば超科学 super-science

(Rorty)としての特権身分を持つものとして考えられてきたことである。この超科学というのは、例えばローティーが特徴付けるように、非歴史的 nonhistorical な正当性を持つ、特権的な探求として考えられている。

その、超科学としての認識論というのは、カントの法廷メタファーが語るように、あらゆる諸科学を裁断し、個々の科学が拠っている概念、明証性、方法論などを吟味し、評価付けを与えることをその目的としている。そして、この法廷において合格印を押された科学のみが、晴れて信頼できる科学として認識論的に保証され、学としての身分を保証されるのだと言われる。例えば、ローティーは次のように述べている²。

哲学という学科は、このようにして、科学・道徳・芸術・宗教による知識の主張を保証したり、または誤りを暴いたりする試みとして見られている。哲学はこうしたことを、[哲学だけが持つ] 知識や心の本性への特別な理解を基にして、行おうと企てることになる。哲学は、それ以外の文化に対して基礎付けの foundational であると言えよう、というのも文化というのは知識の主張の集まりであり、そして哲学こそがそうした主張を裁断するからである。

私は常々、こうした基礎付け主義的な哲学を、傲慢な思想だと考えてきた。哲学を学んでいると、我々は「自然学の基礎付け」や「学問の基礎付け」とかという言葉をしばしば耳にする。しかし、そうした基礎付けを目指すと言われる哲学的な作業が、なぜ必要なのであるのだろうか？ その必然性が私には長く理解できなかったのである。

例えば、現代の高度に専門化した物理学、生物学といった領域の諸研究を考えて頂きたい。彼らの「科学的」なプラクティスというのは、文学部の象牙の塔で哲学書を読んでいる哲学学徒の「非科学的」基礎付け的な作業とは、全く無縁なところで進行している。T.クーンの言葉を借りれば、我々の通常科学の時代にあっては、前提となる自然観、知識観、さらに下部に位置する個々の模範的業績というものが、疑問に付されることなく、科学的なプラクティスが累積的に進行していくのだと言える³。そうした、安定した基盤の元にあっては、「自然学の基礎付け」なるものは全く必要とされないのである。

では、仮にそうであるならば、近代以降の認識論的転回のプロジェクトと言われる一連の作業を、我々は、意味のない営みであったと一蹴すべきなのだろうか。そうではないと私は考える。我々がここで思い起こす必要があるのは、実のところ、近代科学の進展が近代哲学と密接な関係にあったという事実である。つまり、近代科学を推進した当の科学者自身が、近代哲学の設立者でもあったという点である。大陸系の哲学者と目されるデカルト、ライプニッツはもとより、英国に目を転じれば、王立協会の中心的存在であったボイル、フック、ニュートンといった偉大な自然哲学者も含め、これら科学革命を推進した自然哲学者たちは、単に科学的な著作のみならず、それを支え、補完するような形で、認識論・存在論・神学といった領域に渡る著作を遺している。我々は、こうした17世紀の科学革命期に生きた哲学者たちの認識論を考察するにあたっては、彼らは超科学的な営みとしてではなく、正に科学の内部の活動として、科学を支える活動として、認識論を推し進めていたことに留意すべきである。

ロックもこうした自然哲学者たちの例外ではなかった。ロックは、その哲学的主著である『人間知性論』を書いた動機について、「読者への手紙」という、本論に入る前の『人間知性論』のきっかけとなる回想とも言える箇所、次のように述べている⁴。

学界はこんにち、学を前進させるすばらしい設計で後世まで賞賛される記念建造物を残すと思われる大建築家を欠いてはいません。しかしながら、だれもがボイルやシドナムであろうとは願っているはずはありません。そこで、偉大なホイヘンスや比類なきニュートン氏といった巨匠や、その他同じ類いの偉人たちを産む時代では、少しばかり地面を掃除して、真知への道に落ちているごみくずをいくらか片づける下働き Under-Labourerを請け負うことだけで十分な大望というものです。もしかの非凡で勤勉な人々の努力が、うわついで気取った、または理解できない専門語の、学問的だがくだらない使用によって大幅に阻まれてこなかったら、真知は確実に世の中で遥かに進歩していたことでしょう。(下線部は筆者によるもの)

この箇所は、ロックが構想している認識論を、適切な文脈の中で評価しようと

する上で重要である。そしてすでにこの引用において、ロック的な自然主義的認識論が端的に表れているのと、私は見て取る。次の点が、伝統的認識論との対比において、重要である。(次のようなテーゼを私は立てたいと思う)

青木の主張：ロックは、超科学的な営みではなく、同時代の科学の内部において認識論を遂行することを意図している。大科学者との共同作業を意図しているのがその証拠であり、それが、「下働き」という控えめな仕方、自身に課した役割として把握されている。

この主張が正しいとするなら、ロックの認識論は、科学の内部の活動であるという意味で、自然主義的であると言える⁵。このように、伝統的な基礎付け主義としての近代認識論というイメージの中でロックの認識論を見ることは、疑問視されることになる。ロックの認識論は、通時的な変化や時代的な制約を蒙ることのない、超科学を目指していたのではなく、17世紀後半という当時のイギリスにおける様々な具体的な問題—宗教・政治・科学にまつわる特定の問題—を解決するために遂行されたものであった。この意味において、ロックの認識論は諸科学内部の活動であり、とりわけ本稿で私が焦点を合わせる自然科学に特化させて言えば、科学内部の活動であったとすることができる。こうした視座のもとで、以下の論述を見て頂ければ幸いである。

2 科学者の「下働き」とは何か？ 先行研究の批判的検討

それでは、ロックが自ら自任した、科学者の「下働き」としての役割とは、一体何であるのか？ここで我々は、「下働き」という言い方を、勿論文字通りの意味で捉えることで満足してはならないだろう⁶。なぜならロックは彼一流の仕方では比喩的に彼の役割を述べているに違いないからであり、その証拠として、ロックは、「真知への道に落ちているごみくず」や「理解できない専門語」について語り、それらに対して、何らかの批判を『人間知性論』において行おうと意図していることが前の引用から読み取れるからである。

2 - 1 P.アレグザンダーによる分析

我々はこのロックの比喩の意味を理解したいのであるが、この点にかんして、1つの出発点を提供したいと思う。ロック哲学をボイルの粒子哲学の観点から解釈する論文を多く執筆した P.アレグザンダーは、このロックの「科学者の下働き」にかんして、興味深い発言を行っている。アレグザンダーはその著作『観念・性質・粒子』の中で以下のように述べている⁷。

私が信じるに、『人間知性論』に対する誤解は、「読者への手紙」における大建築家と下働きにまつわる箇所から早くも始まることが多いのである。そこで彼〔ロック〕は当時の自然哲学者たちとの関連を何らかの仕方で示唆している。

そして、ロックがここで示唆している下働きとして、以下の5つの役割を列挙している。

- (1)現代の哲学者におけるものと同じ役割、すなわち、科学・道徳といった分野における概念の明晰化、もしくは混乱の除去。
- (2)言わば文字通りの意味での下働き。ボイルのルーティン・ワークの助手を務め、ボイルの出版物に目を通し助言を行った⁸。
- (3)当世の科学の考えや論争を平易に素人に伝える役割。（「新しい哲学者たち」の仕事は、旧来のスコラ派との論争に曝され、彼らスコラ派の用いる語彙は世人にとって蒙昧で理解するのが困難であったため、学術用語の刷新・普及が必要とされていた。）
- (4)当世の科学（粒子仮説）から帰結される世界観や知識観の探求。つまり知識とは何か、我々はどのような種類の事物を知ることができ、またはできないのか、言語の本性とは何か、などの考察。それはまた部分的には、仮説という知識がどのような本性や身分を持つのかの探求も兼ねている。
- (5)生得観念は存在せず、経験から観念を得るという仮説から我々のすべての知

識が得られるという議論や、ボイルの粒子仮説を日常的な事象で説明する議論を説得力ある形で示すことによって、近代科学の仮説演繹形式的な(hypothetico- deductive form)議論の有効性を示し、間接的にボイルや他の科学者たちの支援を行った。

これらの論点⁹は、比喩を文字通り取っている、言わばトリビアルな論点である(2)を除き、すべて、詳細に検討されてしかるべきかと私は思う。しかしながらこの5点にかんして、アレグザンダーは以上の論点の列举を、『観念・性質・粒子』の序文において素描的に行うのみで、これ以上の突っ込んだ論述なり考察を行っていない。また、これら5点の論点は独立した形で言わば単発的に提出されているのみで、お互いにどのような関係を持ち、そしてそれらの諸論点が有機的に織りなされることによって、ロックが『人間知性論』全体で何を行おうとしていたのか、そうした包括的な視点も示されていない。この2点において、アレグザンダーの考察には不満が残る。しかし、このアレグザンダーによる「下働き」の具現化は、ロックの認識論をどのように評価すべきなのかを判定する出発点として、尚有効であるように思える。

2-2 N.ジョリーによる分析

さらに近年に至って、『ロッカーその哲学的思想』を著した N.ジョリーも、ロックが科学者の「下働き」を請け負おうとした点に注目している。ジョリーの考察は、アレグザンダーに比べてより具体的である。ジョリーは、「下働き」としてのロックの作業を次のように分析している¹⁰。

同時代の最良の自然科学者に対する下働きとして、ロックは地面を少しばかり掃除しそして、自然世界の知識へと至る道に横たわるいくつかのごみくずを除かなければならなかった。ここでの「ごみくず」とは、古いものと新しいもの、2つの個別の種類のものがあった。ロックの仕事とは、その両方を除くことに寄与することである。

そしてジョリーは、古い障害と新しい障害の2つの「ごみくず」として、スコラ派の実体形相説と、デカルトの自然学を挙げている。本節では、ロック（とボイル）による自然学の体系とデカルトの自然学の体系とを比較するため、前者ではなく¹¹、後者のデカルトの自然学に焦点を当てて論じていきたい。周知のようにデカルトは、物体の本質を延長と規定したが、こうしたデカルトによる物体即延長とする物体規定や、自然学における独断主義 *dogmatism* を、ロックが除去すべきごみくずの1つとしてジョリーは考えている。ジョリーがその根拠として正しく引用しているのが、『人間知性論』第2巻13章での、ロックの思考実験である。ロックはこの引用箇所、真空の不可能性を論じるデカルトに抗して真空の可能性を論じ、固性 *Solidity* を中核とする物体観を提示しているが¹²、このようにして、ジョリーが指摘するように、デカルトの自然学の形而上学的基礎（とりわけ物体即延長とする物体規定）を攻撃することが、ロックの「下働き」の仕事として重要なウェイトを占めていることは間違いないものと思われる。

しかしながら、ジョリーによる真空の議論は、ロックが生きた時代の科学的な文脈、ないしはロックが真空の可能性を論じた経緯、を十全に扱っているとは言いがたい。この点に関連して、ロックと共同して実験哲学を信奉したボイルが興味深い発言を行っている点に、我々は注目すべきである。ボイルによると、トリチェリの実験により真空の存在が観察されたと見られているが、しかし、そこに火の粒子（デカルトが想定した3種類の粒子の中で最も微細なもの）が充填しているというデカルトの説を、実験により排除することはできないとボイルは述べる¹³。

真空という言葉は曖昧であり、異なった意味で用いられている。[…] 真空という言葉は学者 *philosophers* によって他の意味でも用いられ、厳密に言えば、どんな物体であれ全く物体を含まないような、世界の中にある空間のことを、彼らはその言葉によって意味している。[…] しかし私は、その「真空が得られるかどうかという」論争については、賛成も反対もしないことを立場表明した。というのも、ここでの問いの決定というのは、物体の真なる

概念 notion をどのように述べるかに依存するからであり、デカルト派の者たちは（殆どの他の学者たちは否定するのだが）、この物体の本質が、長さ・幅・奥行きあるいは厚さ、の3次元による延長にのみ存するのであると断定するからである。もしデカルト氏の概念が認められるのであれば、真空を認めるのは不合理であると言われるであろう。というのも、空っぽであると称されるどんな空間であっても、3つの次元を持つものが認められねばならないからであり、それゆえこの3次元であるということが、物体の本質を成り立たせるのに必要な全てだからである。そして、あらゆる実験—水銀や、（人々がそう呼ぶところの）ボイルの機械、または似たような方途のために考案された他の道具 instruments によって行われる実験—は、デカルト派の者たちによって言い逃れられることになる。彼らが言うに、水銀または空気が抜かれた空間は、長さ・幅・奥行きがあるのだから空っぽなのではない。そうなのではなくて、その空間は、ガラスの孔を自由に出入りするだけ微細な、微小粒子で充満しているのである。しかし私は、[...] 真空にかんする論争に対しては、どちらの立場を表明することも控えようと思う。

ボイルがここで鋭く見抜いているように、このデカルトの自然学は、デカルトの形而上学と密接に連結しており、形而上学的な土台から排撃する必要があったのである。しかし実験的な自然哲学者であったボイルは、こうした形而上学的な作業には立ち入らないと述べている。ロックはこうして、ボイルの不備を補完し、ボイルが踏み入らなかった物体規定といった形而上学的な仕事を体系的に行うことにより、言わば共同作業によって、実験哲学という体系から、デカルトの自然学全体を覆そうとしていたのだと見ることができるだろう。以下の図で、両者の自然哲学の体系を図式化してみることにする。

図：デカルト vs. ロック + ボイル

真空の存在	真空は存在しない	真空は可能である
	↑	↑
物体の規定	物体即延長	物体の本質＝固性 E.II.iv
	↑	↑
形而上学的基礎	方法的懐疑により感覚× 我在り、明晰判明	観念は感覚経験から 感覚的真知 E.VI.ii.12

デカルトは自然界の探求にあたって感覚の役割を軽視（無化）し、ただ知性によって物体の規定を行った¹⁴。その結果、論理的に真空の可能性は排除された。それに対しロックの体系では、自然界にかんする知識は感覚経験に始まり、最も感覚に密接な物体の性質として、固性が物体の本質と規定される。そこから、物体即延長というデカルトのテーゼが破棄され、ボイル等による真空実験の成果に意義を与えることが可能になる。

こうした体系的な比較考察は、ジョリーによっても未だ遂行されていない。その理由は明らかである。ジョリーは一章「物質の哲学(The Philosophy of Matter)」の中で、数節にも満たないほどの注目しか「下働き」に当てておらず、依然として、ロックが自任した役割に相当するほどの十全な扱いを与えていないからである。またエピソード程度に散逸したものの、広範な射程を収めるアレグザンダーの(1)～(5)ほどの豊穡さをカバーするものでもない（ジョリーによるデカルト批判、スコラ学批判としてのロックの仕事は、アレグザンダーの(1)にほぼ相当するだろう）。それに対し筆者は、ロックの認識論のプロジェクトを、科学者の「下働き」としての役割を正にそのコアとするものとして捉え、超科学として考えられてきたロック認識論のイメージを変革させようと試みる。

2 - 3 青木の分析

それでは、筆者が目論むロックの自然主義的な認識論のプロジェクトとは何か。科学の内部活動としてのロックの哲学的作業を、アレグザンダーによる素描と比較させながら、私なりに再構成してみることにする。

アレグザンダーによる5点を次のようにキーワードで纏めるとすれば、(1)概念の明晰化、混乱の除去、(2)文字通りの助手、(3)学術用語の刷新による大衆化、(4)粒子仮説の哲学的帰結、(5)仮説演繹的手法の有効性の提示、となるだろう。私に関心をよせるのは、(1)と(3)と(4)である。(2)は、ボイルの科学的言説に対し、哲学者としてのロックが独創的な貢献を行う余地はないだろうし、(5)については、ロック自身の『人間知性論』第2巻での言説と食い違う¹⁵ので、ミスリーディングだと考える。私はこれらの論点に代えて、次のようにして、ロックによる科学者の「下働き」としてのプログラムを定式化する。

- (A) スコラ学やデカルトによる（自然学上の）形而上学を一掃し、知識の原型が感覚経験に由来すること、観察や実験の果たす重要性などを主張することにより、王立協会の推進する実験哲学 Experimental Philosophy の理論的支柱たらしとする。つまり、知識の基準を観察経験に求めることにより、新しい実験哲学に即応した知識の規範を設け、王立協会のプログラムを強力に後ろ盾したと考えられる。
- (B) この実験哲学という方法論に整合的な形で、ボイルの粒子仮説を論理的に再構成する。ロックが『人間知性論』を執筆していた当時、科学的方法論が熾烈に議論され¹⁶、方法論の原理と、科学的業績との整合性が厳しく問われていた時代にあっては、欠かすことのできない作業であった、というのが私の主張である¹⁷。つまりロックは、経験論の土台から、当時最先端の科学理論である粒子仮説を正当化しようとした。これが、(B)での私の主張である。
- (C) この粒子仮説の哲学的帰結として、我々の世界観がいかに変容するのか、その帰結を哲学的な分析¹⁸によって明らかにする。そもそも、外界の粒子の存在を前提とした「心の中」の存在として保証される観念という道具立てや、一次性質・二次性質の区別、実在的本質の規定、自然学的知識

の限界（そこから帰結する実験観察の重要性）といった様々な『人間知性論』のトピックは、粒子仮説の哲学的帰結と捉えなければ十全に理解することができない。

この私による定式化は、アレグザンダーによる、言わばアットランダムな(1)～(5)の列挙という、非有機的・非組織的なロックの「下働き」の定式化とは異なり、体系性を有していると言える。

(A)は、「知識とは何か?」「どのような手続きによって知識は得られるのか?」という伝統的な知識の哲学（認識論）に則った定式化であるが、これを私は T. クーンの「社会学的パラダイム」に相当するようなものだと考えている。つまり、科学者集団が科学的プラクティス（通常科学におけるパズル解き）を安定して行うために不可欠な基盤、法学での判例に相当するような方法論的規範といったものを、(A)は指している。

それに続き、(B)は、この方法論的規範に従って、どのようにして模範的な科学的業績が示されるのか、それをロックは『人間知性論』において経験論の枠内で整合的に論証し、論理的な基盤が脆弱であるボイルの粒子哲学を後ろ盾したというのが、私のここでの主張である。

(C)はやや趣旨を異にするが、(A)(B)で得られた帰結を、ロックは従来の哲学の問題へと拡張させたという主張である¹⁹。それにより、従来の哲学的問題が、解消されたとは言えないとしても、新しい前提や視点から取り組まれることになった。そういったことを、(C)は主張している。とりわけ、ロックの観念説という中心的な道具立て自体が、当時の粒子哲学という前提なしでは十全に機能しないという主張が、ロックの自然主義を際立たせる上で重要であると、私は考えている²⁰。

3 ロックが「下働き」を自任した科学史的文脈

こうして、ボイルやニュートンといった大科学者の「下働き」たらんとしてロックが展開した認識論の、豊かな射程が垣間見れたのではないかと思える。最後に、ロックがこうした「下働き」を自任した科学史における文脈を明らか

にして本論を終えたい。というのも、次のように読者は考えるのではないかと、私には思えるからである。(A)で言われた、経験論的な知識の規範、実験や観察に基づく知識観というのは、現在ではごくありふれた考え方ではないのか。理学部や工学部に行くまでもなく、我々がすでに知っているように、これまでの科学的なプラクティス、または科学の歴史というのは、常に実験観察によって支えられてきたのではないか。現在支配的な科学方法論であると見られる仮説演繹の方法であっても、いくつかの可能な仮説を実験によって篩い落とすという点では、実験の重要性に変わりはない。

しかし、こうした今では常識となっているような考え方を、我々は、ロックが生きていた頃の時代に投入して良いのだろうか。それは、明らかな時代錯誤である。そもそも、我々の現在常識として信じ込んでいるような前提が、イギリス王立協会を中心とした実験哲学者たちによって創出されたと見るのが、正しい見方なのではないだろうか。我々は、ロックの行った「下働き」としての哲学の持つインパクトを正しく理解するためには、ロックが正に生きたその時代の学的知識の規範というものと、ロックの与えた知識の規範との隔離を評価しなければならない。つまり、ロックが共に生きた科学者集団の中で、ロック哲学を査定しなければならないのである。

こうした私の同時代的とも言えるアプローチは、ロック自身の、科学者の「下働き」を自任した正にその発言において確認することができる。ロックは、ボイルやシドナム、ニュートンといった偉大な科学者との関係において、自身の哲学を考えていたことをすでに引用したが、ここでロックは明らかに、王立協会の一員として発言していることが、この引用により確認されるだろう。ロックはオックスフォード時代からボイルの化学的研究（血液の分析など）の助手を勤め、後に当代第一の名医であったシドナムの助手も勤め、さらにはオランダ亡命から帰国後は、ニュートンと親密な関係にあったことが指摘されている²¹。一方、ボイルは初代の王立協会の会長であり、後にニュートンが次世代の会長として継承している（シドナムは例外として王立協会の一員ではなかったが、彼の実験的医学は、王立協会の精神と符号する）。よって、ロックの「下働き」としての仕事は、王立協会の理論的支柱たることであったと、容易に想像することが可能である。ロック自身も、哲学者であるにも拘らず、1668年に科

学者集団である王立協会の一員として選出されていることが、それを物語っている。

こうした点について、ウルハウスはその著書である『ロック』において、非常に興味深い指摘を行っている²²。王立協会は、狭く科学者のみによる自然科学にのみ閉ざされた変革を求める集団なのではなくて、もっと広くスコラ学による街学的な論争を実験によって一掃することを目指す思想的集団であったことをウルハウスは指摘する²³。

[...] 王立協会は現代における意味での科学のみに狭く限られたものではなかった。それはより広く哲学的なものであり、スコラ主義や伝統的な学への一般的な不満を含んでいたのである。王立協会のモットーである、"Nullius in Verba" つまりは「他の誰の言葉にもよらずに」は、過去の権威を全般に渡って拒絶しようとする王立協会の見解を要約するものであった。

そして、当時の知識の規範として、アリストテレスが学 *Scientia* として認めた演繹的推論、すなわち、「他の誰か」の引用と三段論法との組み合わせを中心とした知識の獲得方法が、依然として学院では支配的であったことをウルハウスは指摘する。そこでは、王立協会によって推進されていたタイプの、顕微鏡や望遠鏡を用いての観察経験というのは、「学」としての身分が与えられず、言わば非常に卑しい身分の探求であると考えられていたのである。ウルハウスに言わせれば、「17世紀における知識 *Knowledge* とは、自然界の仕組みを観察をベースとして研究して得るようなものではなかった」のである。

こうしたスコラ的な学知が支配的である時代にあって必要であったのは、単に実験観察を積み重ねる作業ではなくて（それは意味のない、学として値しないものであった）、より大きなスケールでの知識観の変革、あるべき知識の姿・規範といったものの変革であったであろう。ロックが確立した経験主義というのは、こうした非常に大きなインパクトを社会や科学的営みに対して与えようとするものであったのである。これが、ロックが(A)の役割を担おうとした、大まかな思想的文脈である。（それでは、(A)の作業の内実は何か。この論点へと自然と本論は移行すべきであるが、紙面の都合上、本論では述べることはで

きない。要点としては、『人間知性論』第1巻でのアプリオリな知識の否定、第2巻での観念経験論、それと連動した第3巻でのロックの言語哲学などが、(A)の作業の内実である。)

おわりに

こうして、ロックが科学者の「下働き」を自任するに至る歴史的文脈が、少しでも明晰になったのではないかと思う。本論の初めに私は、ロックの認識論が、超歴史的な、超科学的な営みではなく、ある時代のある具体的な問題を解決するために考案されたものであるという趣旨の主張を行った。もし私のこうした主張が正しいとすれば、これまで伝統的に言われてきた「基礎付け主義的な」プロジェクトとしてのロック認識論のイメージが、疑問に付されてくることは間違いないだろう。ロックの認識論は、「自然学の形而上学的土台」(Burt²⁴)を与えたといった仕方で理解されなければならない、または「ロックとニュートンの哲学は、アリストテレス、アキナス、デカルト、カントといった者たちが知的体系 intellectual system を提供したというのと同じ広い意味での知的体系」(Rogers²⁵)を供給したものとして見なければならないだろう。こうして、超科学としての認識論は、少なくともロックに対する正当な評価ではないし、そもそも、そうした超科学的な営みが歴史的に有効であったのか、そういった営みは哲学者による砂上の楼閣にすぎなかったのではないか、というよりラディカルな主張にまで、ロックが行った認識論は拡張可能なのではないかと、私は考えている。

註

¹ 以下の、デカルト—ロック—カントの流れによる基礎付け主義の系譜は、Rorty によるアウトラインを私なりに素描したものである。Richard Rorty, *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton University Press, 1979.

² *ibid.*, p.3.

³ Thomas Kuhn, *The Structure of Scientific Revolutions*, 2nd ed., Chicago University Press, 1970, esp. chapter II “The Route to Normal Science”.

⁴ John Locke, *An Essay Concerning Human Understanding*, ed. by Peter H. Nidditch, Oxford University Press, 1975, pp.9-10. 『人間知性論』からの引用は、巻・章・節により E I.ii.3 の

ようにして行う。

- ⁵ 認識論の自然主義については、Quine(1968)の論文が出所として重要である。また、その解説としては、戸田山和久『知識の哲学』を、近年の哲学的自然主義を定式化・擁護する論考として、同じ著者による「哲学的自然主義の可能性」を参照頂きたい。戸田山は、認識論における自然主義の中核を、Papineauに従い、デカルト的な第一哲学の放棄と見なす。筆者も本稿で論じているように、自然主義的認識論のコアを超科学の放棄に見る点において、同じ意見を持つ。W.V.Quine, “Epistemology Naturalized”, in *Ontological relativity and other essays*, Columbia University Press, 1968.; 戸田山和久『知識の哲学』産業図書, 2002 年.; 戸田山和久「哲学的自然主義の可能性」『思想』no.948, 2003 年.; David Papineau, *Philosophical Naturalism*, Basil Blackwell, 1993.
- ⁶ 例えば、ウルハウスもこの箇所にかんして、「『人間知性論』は新しい実験主義の方法を説明し、正当化する多数の議論を含んでいる。ボイルやニュートンの下働きたらんとするロックの主張を単にレトリック的な装飾と見なすべきではない」と述べ、「ゴミ片づけ」や「土台づくり」といった言葉が当時の新しい実験主義を提唱する者たち（ペーコン、ヘンリー・パワー、グランヴィル、トーマス・スプラット etc.）が好んで用いたメタファーであることを様々な引用によって明らかにしている。次のウルハウスによる論説を参照されたい。R.S.Woolhouse, *Locke*, Harvester Press, 1983, pp.31-38.
- ⁷ Peter Alexander, *Ideas, Qualities and Corpuscles*, Cambridge University Press, 1985, pp.6-8.
- ⁸ ロックはボイルの死後、1692 年刊の『空気的一般誌』という著作の編集を行っている。その著作でロックは、文字通りの下働きとも言える仕事をしている。1666 年 6 月から 1683 年 6 月にわたって、75 年から 81 年までの間隙を除けば、多い月には毎日、少ない月にも一週間ほどの空気にかんする観測記録を残している。cf. Robert Boyle, *The General History of the Air*, in *The Works of the Honourable Robert Boyle*, ed. by Thomas Birch, 2nd edition, London, 1772 (reprinted, Georg Olms, 1966), vol.5, pp.655-687.
- ⁹ これら 5 点は、哲学者が科学者に対して何を行えるのか、その点にかんして非常に示唆に富んでいると思える。現代の認知科学に対する哲学者の貢献可能な作業を論じたものとして、戸田山和久「科学（者）の中の哲学（者）ー哲学の生存戦略とそのアジェンダ」『哲学の探求』第 29 号, 2002 年 も参照されたい。
- ¹⁰ Nicholas Jolly, *Locke : his philosophical thought*, Oxford University Press, p.56.
- ¹¹ この点にかんしてジョリーは、『人間知性論』第 2 巻 8 章での、物体の一次性質・二次性質の区別の議論を、実体形相説を退けることを意図した議論と見て取る。ハイドも同じような観点から詳細な論考を行っているので参照されたい。cf. Thomas Heyd, “Locke’s Arguments for the Resemblance Thesis Revisited”, *Locke Newsletter*, vol.25, 1994.
- ¹² 他にも、ジョリーは引用していないがデカルト批判として重要なのは、E II.iv, III.vi, IV.vii などである。しかし、細かい議論はここでは行うことはできない。
- ¹³ Robert Boyle, *A Free Inquiry into the Vulgarly received Notion of Matter*, in *The Works*, vol.5, p.227.
- ¹⁴ この点については、次のウィルソンの論考を参考にされたい。Margaret.D Wilson, “Descartes on the Perception of Primary Qualities”, in *Essays on the Philosophy and Science of Rene Descartes*, ed. by Stephen Ross, Oxford University Press, 1993.

- ¹⁵ 例えば、ロックは知識の材料である観念が経験から由来することを、一言の元に「経験から」と断言し(E II.i.2)、また複合観念が単純観念から由来することを繰り返し主張している(cf. E II.i.24, II.xii.8, II.xiv.31, II.xvii.22, II.xviii.6, etc.)。
- ¹⁶ この点については、すでに科学史の方面から、多くの優れた著作・論文が公表されている。Burt(1932), Jones(1961), Rogers(1982)などを私はここで念頭に置いている。
E.A.Burt, *The Metaphysical Foundations of Modern Physical Science*, Routledge and Kegan Paul, 1932.; R.F.Jones, *Ancients and Moderns : A Study of the Rise of the Scientific Movement in Seventeenth-Century England*, Washington University Press, 1961 (reprinted in Dover Edition, 1982).; G.A.J.Rogers, “The System of Locke and Newton”, in *Contemporary Newtonian Research*, ed.by Z.Bechler, D.Reidel Publishing, 1982 (reprinted in *Seventeenth-Century Natural Scientists*, ed.by Vere Chappell, Garland Pub., 1992).
- ¹⁷ こうした点に注目し、同様な視点からロックによる経験論からの粒子論の再構成という作業に注目したものとして、次の論考も参照して頂きたい。David E.Soles, “Locke’s Empiricism and the Postulation of Unobservables”, in *Journal of the History of Philosophy*, vol.23, 1985.
- ¹⁸ 「哲学的な分析」といっても、別に私は哲学者に固有な分析などないと考えている。これは、科学と哲学との連続性を主張する自然主義者としては当然の主張である。では哲学的な分析とは何か、と問われるなら、哲学者は主に概念的な分析を得意とするのに対して、科学者は理論と実験結果との整合性をチェックするスキルに長けている、などの説明が可能であろう。しかし、これも程度問題であって、概念分析に長けた科学者がいることを私は否定しようとは思わない。
- ¹⁹ この点においては、私はアレグザンダーの(4)と同意見である。
- ²⁰ この点については、次の拙論で論じたので、もしご関心があれば参照頂きたい。青木滋之「ロックの自然主義—『人間知性論における粒子仮説の役割』」,『人間存在論』第8号, 2002年
- ²¹ こうした経緯については、Rogers(1982)に詳しい解説があるので、そちらを参照頂きたい。
- ²² Woolhouse(1983), chapter 4 “‘Ancients’ versus ‘Moderns’”.
- ²³ *ibid.*, p.37.
- ²⁴ Burt(1932), pp.11-16.
- ²⁵ Rogers(1982), p.215.

(あおき しげゆき/Keele University)